

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会

J. S. バッハ作曲

ミサ曲口短調

'88 3月12日(土)

岩手県民会館大ホール

午後6時30分開演

ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

代表 木村吉彦

本日は、お忙しい中ようこそおいで下さいました。

今回は、85年のヨハネ受難曲・86年の西ドイツ演奏旅行につづき、3度目の合同演奏会です。仙台宗教音楽合唱団は、本年創立20周年を迎え、私共が模範とすべき活動を行っている合唱団です。85年以来のおつきあいの中でいただいた数々の御教示が現在のカンタータ・フェラインの活動を支えていると言っても過言ではありません。

一方、音楽面では、一昨年の演奏旅行を通して、「音楽に国境はない」「人生についての思いは万国共通である」ことを共に実感した仲間であります。それは、宗教音楽の中で語られている「人生のはかなさ」「生きる喜びと苦しみ」「自分の力ではどうすることもできない大きな力に対する畏敬の念」が、国籍や言葉や信仰の違いを超えた普遍的な事柄である、という実感でした。ドイツでのこの実感を皆様にお伝えできる演奏であれば幸いです。

最後に、指揮者佐々木正利先生をはじめ、ソリスト・オーケストラの諸先生方、後援をいただきました皆様に感謝しまして、ごあいさつといたします。

Messe in h-moll

JOHANN SEBASTIAN BACH BWV232

I. MISSA ミサ

Kyrie 主よ憐み給え

Gloria 栄光

----- 休憩 -----

II. SYMBOLUM NICENUM ニケア信経

(CREDO) 我は信ず

III. SANCTUS 聖なるかな

IV. OSANNA オザンナ

BENEDICTUS 祝福されしもの

AGNUS DEI 神の小羊

DONA NOBIS PACEM 我らに平和を与え給え

J. S. バッハ作曲 ミサ曲口短調

指揮	佐々木 正 利
独 唱	五十嵐 郁 子 (ソプラノ I)
	佐々木 まり子 (ソプラノ II、アルト)
	佐々木 正 利 (テノール)
	芳 野 靖 夫 (バス)
管 弦 楽	東京バッハ・カンタータ・アンサンブル (コンサート・マスター: 蒲生克郷)
オルガン	鈴 木 雅 明
合 唱	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 仙台宗教音楽合唱団

演奏会によせて

盛岡/バッハ・カンタータ・フェライン

常任指揮者 佐々木 正 利

バッハのカンタータを歌って楽しもうと、フェライン（仲間）として発足して10年目の昨年、『ドイツ音楽の父』シュッツと、文字通り総ての『音楽の父』バッハをもって、一つの区切りをつけた私達が、新たなる第一歩を「ミサ曲口短調」で記すことになったことは、良くも悪くも大きな意味を持っている。

「ミサ曲口短調」——古今東西を通じて、技術的にも体力的にも精神的にも、そして信仰的にも、理解し表現するにこれ程難しい曲は、おそらくあるまい。「口短調」とともに双璧の一角を形成する「マタイ受難曲」が、一連の物語性から、ヒューマニスティックなアプローチも可能なのに対して、カンタータ数曲分（合唱だけなら優に10曲分を超える）の容量をもつこの「口短調」は、単に分量的な問題にとどまらず、ミサ曲の歌詞そのものが発語された始原の現実になぞさかのぼろうとする、バッハの気迫と音楽の底知れぬ深さに、極めれば極める程完全消化には程遠い現実の厳しさを実感させられるのである。「マタイ」と同様な性格をもつ「ヨハネ受難曲」を3年前演奏し、作品の深大なる精神性に圧倒されながらも、何とか、大家の足跡を現代に証すことができた私達も、正直のところ「口短調」には完全に跳ね返されている。この10年間、カンタータを徹底して学んできた私達が、その延長線上に「口短調」を見い出すことは大変意義深い、単にやることで事足り、とするには、あまりにも厳しすぎる現実がそこにはある。作曲の経緯、背景はともかく、作品の集大成と各ジャンルのより深い理念追求を心掛けて

いた後期/バッハの制作姿勢を如実に反映している「口短調」は、典礼的な実用音楽ではなく、ミサ曲のテキストを聖書の文脈によってさかのぼり、解明せんとする、バッハがみせる《ルターの万人祭司主義的精神》を根にすえた高邁な芸術作品である。この観点を如何に理解するかが、技術的な問題と兼ね合わせて、私達に課せられた命題であつた。果たしてそれを克服できたかどうか——、様々な想いとアプローチを経て、熱烈な向上心とともに今宵タクトをふりおろす。

幸い、我が国音楽界の第一人者芳野靖夫氏をはじめ、ソリスト・オーケストラと超一流の共演者を得ることができ、舞台は整えられた。

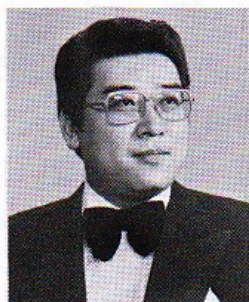
「口短調」とは？——ここに杉山好東大教授の言をお借りして、今宵の演奏と合わせて一つの結論を見い出していただけたなら、これに優る喜びはない。

『キリストのできごとを通しての神からの語りかけと、救いにあずかる異邦人からの感謝と讃美の応答という、その生き生きした人格的弁証法の構造、その普遍人類的な包容力、「面倒くさい枝道をもたず」（高村光太郎）に、事柄の本質に迫るその透明な徹底性のゆえに、およそ聞く耳ある人間に、今もなお永遠の平和と神の国の到来の確かな希望の灯をともしつづける脱「宗教的」音楽ドラマへと昇華された稀有の作品というべきではないだろうか。』

（バッハ合唱団、プログラム・ノートより

1987. 12. 12）

プロフィール



指揮・テノール 佐々木 正 利

東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修士課程及び博士後期課程修了。声楽を畑中良輔、須賀靖元、小林道夫、森明彦の各氏に、楽理を服部幸三、角倉一朗の各氏に、作曲を松本民之助に、宗教音楽を岳藤豪希氏に師事。芸大在学中より、バロックから現代に亘る宗教作品、特にJ. S. バッハの声楽曲に深い造詣を示し、芸大メサイヤ公演、定期演奏会はじめ大学、一般合唱団と多数共演。特に1978年芸大マタイ受難曲公演にて、福音史家として高く評価され以後そのスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979年シュトゥットガルトに渡り、ローレ・フィッシャー教授に師事。同年南ドイツにて数回歌曲リサイタルを開き好評を博す。1980年第6回ライブツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年まで、デットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、ヘルムート・クレッチマル教授に師事。この間同大学定期演奏会で、ドヴォルザーク・レクイエムの特ノールソロを務めたのをはじめ、ドイツ、オーストリア、スイス、フランス、オランダ、ベルギー各地で一流オーケストラ、合唱団と多数共演。1980年ウィーン楽友協会ホールに於けるマタイ受難曲においては「若き日のペーター・シュライヤー」と新聞各紙で絶賛される。1982年ハンブルク、ブリュッセルの短調ミサでは特に高い評価を得た。帰国後もN響、読響、都響、日フィル、新日フィル、東響の定期演奏会等に出演し、K・マズア、H・シュタイン、H・プロムシュテット、H・ヴァンシャーマン、H・リリング、小沢征爾、秋山和慶の各氏等と共演。1985年ザルツブルグ音楽祭に招かれ、R・バーダー指揮のベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊、ザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団とバッハ・マニフィカト、モーツァルト戴冠ミサを共演、好評を博す。滞独中オペラでは、コシ・ファン・トゥッテ・フェランド、フィデリオ・ヤッキーン、スカララッティ・グリセルダ・コッラード等で出演、現在までリサイタル8回、NHK-FMリサイタル4回等歌曲の分野でも活躍。長年に亘り、小林道夫氏のもと東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの指揮者を務め、後進の指導にあたる。1987年にはH・リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにて、テノール・マスタークラスの講師を務める。現在、岩手大学教育学部音楽科助教授。二期会会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各常任指揮者。



バス 芳 野 靖 夫

広島大学卒業。東京芸術大学・大学院修了。西独デットモルト音楽大学でG・ヴィイセンボルンに師事、オラトリオとリートを学ぶ。1960年モーツァルトのレクイエムでデビュー、以後N響、読響、日フィル、新日フィル、都響、東響、東フィル、京響ほか主要オーケストラにむかえられ、マルケヴィッチ、ヤンソンス、スロヴァーク、リリング、ワルベルク、ライトナー、スィートナー、サヴァリツシュ、コシュラー、ロッホラン、マズア、マーク、フルネ、ボドー、小沢といった指揮者と、バロックから現代に及ぶオラトリオその他独唱をふくむ管弦楽のソリストとして協演し、又シューベルトの3大歌曲集をはじめ、ベートーヴェン、シューマン、ブラームス、R・シュトラウス、ヴォルフ、マーラー等のドイツ歌曲を中心としたリサイタリストとして、積極的な演奏活動を行い、現在日本のコンサート歌手の第一人者と認められている。又、甘美で力強い響きの有る声、格調の高い音楽性、豊かな表現力をもった演奏は国内はもとより、国外においても極めて高い評価をうけている。二期会会員、フェリス女学院短大音楽科教授。



ソプラノⅠ 五十嵐 郁子

東京芸術大学大学院修了。文化庁オペラ研修所修了後、1985年まで、ザルツブルグ、ミラノへ留学。

1978、79年、日本音楽コンクール入選。83年イタリア、ベッリーニ・コンクール入賞。84年オランダ、ヘルトゲンボッシュ国際声楽コンクール第2位（1位なし）受賞。

サヴァリッシュ指揮、N響1,000回記念特別演奏会「エリア」、クルト・マズア指揮、読響「エリア」、ケーゲル指揮「メサイア」「第九」「口短調ミサ」「マタイ受難曲」「戴冠ミサ」「ハ短調ミサ」「小荘厳ミサ」などに出演する他、芸大定期オペラ「スザンナの秘密」、藤原歌劇団「ジャンニ・スキッキ」、二期会「聴耳頭巾」、日生「オルフェオとエウリディーチェ」、室内歌劇場「子供と呪文」「チエツキーナは良い娘」、京都教育大「ボエーム」等のオペラ、TBS「音楽の旅はるか」、NHK「芸術劇場」「フレッシュ・コンサート」にも出演。

また、83年、イタリア、ピアチェンツァにて、ジュゼッペ・ディ・ステファノ氏と共演。



ソプラノⅡ、アルト 佐々木 まり子

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱科修了。毎日学生音楽コンクール西日本1位。NHK新人演奏会出演。伊藤亘行、森明彦の両氏に師事。

学部在学中より小林道夫氏のもとにおける東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブ演奏会において数多くのカンタータ、オラトリオのアルトソロを受け持つ。又、大学合唱団及び一般合唱団と多数共演。モーツァルト「レクイエム」「戴冠ミサ」ヘンデル「メサイア」バッハ「口短調ミサ」などに出演する。1980年にデトモルト北西ドイツ音楽大学に留学し、ヘルムート・クレッチマールに師事。その間北ドイツにおいてバッハを中心とした宗教音楽演奏会に数多く出演。ヒルデスハイムにおける「アルトソロカンタータ」ミュンスターにおけるC・Ph・E・バッハの「マニフィカート」は新聞紙上で絶讃される。帰国後もH・ヴィンシャーマンとの共演をはじめ、「マタイ」「ヨハネ」両受難曲「口短調ミサ」「クリスマス・オラトリオ」多数のカンタータ、ヘンデルの「メサイア」「エジプトのイスラエル人」メンデルスゾーンの「エリア」などオラトリオのソリストとして東京を中心に、札幌・仙台・横浜・名古屋の各地で演奏活動を行っている。

1985年には西ドイツのオルデンブルク・アーヘンにてヘンデルの「ブロッケス受難曲」バッハの「復活祭オラトリオ」のアルトソロを歌い、1986年にもメサイアのソリストとして渡独した。



コンサートマスター 蒲 生 克 郷

1976年東京芸術大学卒業。NHK・FM「夕べのリサイタル・新人演奏会」に出演。

1976年～1978年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場管弦楽団に在籍の傍ら、ヴュルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。また、ヒルデスハイム室内管弦楽団のコンサートマスターをつとめる。帰国後は越後弦楽四重奏団、東京バロック・アンサンブル、東京バッハ・アカデミー等の室内アンサンブルで活躍する一方、芸大バッハ・カンタータ・クラブ、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、盛岡バッハ・アンサンブルの指揮者を務める。

現在、久合田緑弦楽四重奏団、芸大バッハ・カンタータ・クラブ各メンバー。水戸バッハ・コレギウム常任指揮者。東京芸術大学管弦楽研究部講師。神戸女子学院大学音楽部講師。

故多久興、海野義雄、ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。



オルガン 鈴木 雅 明

神戸に生まれる。12歳より教会のオルガニストを務め、東京芸術大学作曲科にて、故矢代秋雄氏に師事。卒業後、同大学大学院オルガン科において、広野嗣雄氏に師事すると共に、古楽研究会において、チェンバロを鍋島元子氏に学んだ。さらに1979年より、アムステルダム・スウェーリンク音楽院に進み、チェンバロをトン・コープマン、オルガンをピート・ケーに師事。同音楽院よりチェンバロとオルガン双方のソリスト・ディプロマを得た。その間、1980年には、ブルージュ国際チェンバロ・コンクール（通奏低音部門）において第2位（1位なし）、1982年には、同オルガン・コンクールに第3位入賞を果たした。西ドイツ・デュイスブルク国立音楽大学講師を経て、現在、松蔭女子学院大学（神戸）および桐朋学園大学（東京）にて教鞭をとっている。松蔭女子学院大学においては、特別に音響設計されたチャペルとマルク・ガルニエ製作によるフランス・クラシックオルガンを用いて、積極的にコンサートシリーズを企画する他、全国各地でチェンバロ・オルガン奏者及び指揮者として演奏活動を行い、またオランダ・ドイツ・フランスを中心とするヨーロッパ各地では、毎年コンサート・ツアーを行っている。とくに、一昨年夏のオランダ・ハーレムでのリサイタルでは、“オルガンを知りつくした生氣あふれる雄大な演奏……”と紙上で絶賛された。プロテスタント教会音楽の研究も手がけ、特にカルヴァンの詩篇歌の普及に努めている。日本キリスト改革派東京恩寵教会オルガニスト。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京芸術大学の学内サークルとして活動しているバッハ・カンタータ・クラブのOBを中心に、今回の様なバッハの宗教曲等の演奏会の為に編成される室内オーケストラである。母体となっているバッハ・カンタータクラブは、1970年に創立、顧問に服部幸三教授、指導・指揮に小林道夫氏を迎え、現在に至るまで、毎年の定期公演を中心に活発な活動を続けている。また、北海道・東北・東海・関西方面への演奏旅行も行っている。両合唱団とは、バッハ「ヨハネ受難曲」、ヘンデル「メサイア」等、数多く協演し、好評を博す。今回の演奏会に参加したメンバーも各自が、日本のトップオーケストラの首席奏者として、また独奏会やアンサンブルの一員として、各方面で活躍し、その卓越した演奏力と音楽性には、高い評価を得ている。

●Violin I	蒲 生 克 郷	花 崎 淳 生	服 部 暁 美	富 安 美 穂	大 谷 美 佐 子
II	田 崎 圩 真	三 溝 あ け み	長 谷 川 み さ	石 井 優 子	櫛 崎 美 奈 子
●Viola	李 善 銘	山 本 由 美 子	上 田 恭 子		
●Cello	田 崎 瑞 博	中 沢 央 子	前 田 善 彦		
●Contrabass	蓮 池 仁				
●Flute	阿 部 博 光	白 尾 隆			
●Oboe	小 畑 善 昭	渡 辺 克 也	成 田 恵 子		
●Fagott	寺 下 徹	菊 地 保			
●Horn	南 浩 之				
●Trumpet	海 保 泉	目 良 佳 延	坂 井 俊 博		
●Timpani	近 藤 健 一				
●Organ	鈴 木 雅 明				

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

《ソプラノ》

伊藤香織	伊藤さゆり	井上育子	●遠藤澄江	大内京子	●柏百合子
金子亜貴子	菊池節子	坂巻奈美恵	沢田東子	戸蔭優子	土室千春
○藤田育世	古内敬子	村上伊久子	横山理香	渡辺栄美子	泉山尚子
及川芳里	及川彩子	●小川牧子	久保木万喜子	○斎藤純子	杉原良子
寿松木建子	杉沢由紀	高橋由華	滝沢真紀子	新沼理恵	早川貴子
平野陽子	福田温子	松村寿子	柳田松子	矢幅嘉子	●吉田真由美

《アルト》

小野成美	兼田紀美子	雁部伊都子	菊池敏子	菊地美樹子	吉川由美子
桐原絹子	○佐々木志保子	高橋尚子	土田潤子	中野晶子	長沢雅子
細谷地美奈子	早川芙美子	盛山智美	Evelyn Olson	阿部怜子	井上未由子
遠藤晴美	及川留美	小笠原未知	雁部伸枝	●佐々木久子	佐藤公
中田真佐子	鳴海真希子	平賀尚子	三上真美	山口洋子	吉田由香里

《テノール》

●阿部実	太田頼則	織田靖夫	昆和宏	佐々木朋也	○佐々木幹雄
鈴木貴俊	鈴木康之	竹田光宏	♪中野寛司		

《バス》

稲葉正俊	今泉利	☆小原一穂	小原浄二	賀川宏之	木村吉彦
佐々木義幸	○佐藤智一	佐藤英靖	下田潤	杉井智一	●高橋宏治
武田宏之	三島豊	村上敦司	矢口尚	横山泉	

《練習オルガニスト》

吉田由香里

仙台宗教音楽合唱団

《ソプラノ》

赤尾裕子	遠藤昌子	北浦由貴子	沓沢ひとみ	高橋香織	●竹内恵子
中井千佳子	●長嶺理恵	福士淑恵	目黒やそ	○山下千賀	●相澤徳子
青木美絵	氏家祝子	尾形由美	男沢信子	菊池瑠璃子	木村文子
●近藤貴子	斎藤陽子	鈴木江美	高橋希延	高山美智子	○畑山由佳

《アルト》

池田裕子	伊東正寿	伊藤美智子	井上紘子	大内光子	加藤知子
加藤智美	北山祐子	斎藤潤子	○佐々木潔子	●佐藤真理	鈴木利枝
園部真知子	西田千代子	八島真弓	村上淑子	山本真理	

《テノール》

伊藤竜一	内山慎一	●河原清	北田貴義	○佐藤森夫	鈴木博丈
田島誠	田中総一郎	平居高志	中村洋	松原信行	

《バス》

太田俊一	小川浩	☆加藤宏朗	工藤成敬	斉藤泉	斎藤紘一
○佐藤清陽	佐藤司	佐藤佳樹	白石裕	富岡洋	中井祐一
●中村隆夫	藤倉宏文	御子柴達	森雅彦	八重樫捷朗	山岸健一

★和田知久

《練習オルガニスト》

伊藤恵

(☆. コンサートマスター、★. サブ・コンサートマスター、○. パートリーダー)
 ●. サブ・パートリーダー、♪. ボイストレーナー

「ミサ曲口短調」—二つの存在理由

「ミサ曲口短調」は有名であり、ややこしい。

という解説が一番簡潔で良いと思う。本当の事だし、読む時間が短くて済む。とはいえ大勢のお客様の中には、開演までプログラムでも読みながら暇をつぶそう、という方もいらっしゃるだろうから、やっぱり長い蛇足を付け加える事にした。

バッハの数多い作品の中で、最高の傑作と思うものを挙げろと言われれば、「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」そして「ミサ曲口短調」を推す人が多いのではないだろうか。

さらに全曲を聴いた事がなくとも名前ぐらいは知っているという人は相当の数にのぼるだろう。確かに名曲であるという点に関して、これら三曲の三角関係は極めて緊張に充ちたものであり、互いに相譲らぬ実力を示していると思う。

だが、ややこしい事に関しては「ミサ曲口短調」は両受難曲の追従を許さない。その原因をたどってみると、この曲が完全なミサの形をしているのがそもそもの誤り(?)と言えそうだ。ミサ曲として一応最初から最後まで揃ったものをバッハは他に書かなかった。つまりプロテスタント教会の礼拝のために膨大な量のカンタータや受難曲を作曲したバッハにとって、「口短調」は特異な存在と言える。

そして、この貴重な一曲さえも、実際にカトリック教会の礼拝のためには使えないというのだから始末に負えない。長過ぎるのである。結婚式のケーキみたいに、食べられなくても飾っておけばいいじゃないかと言われても困る。堅実な職人バッハは食べるためにしかケーキを焼かなかったからだ。先に挙げた2つの受難曲はもちろん、全てのカンタータやモテットだって注文に応じ、自分の指揮で演奏するために書かれたのだし、実際に彼自身の手で何度も演奏されたという記録がある。誠実かつ腕利きの職人のバッハに起こった異変……? と何やら面白そうな展開を期待したいが、ここで待ったがかかるから面倒くさい。オマエはさっきから口短調、口短調と気安く呼ぶけれど、それは本当はバラバラの曲を集めたんで、正しくは「ミサ」、「ニケア信経」、「サンクトゥス」、「オザンナ・ベネディクトゥス・アニュスデイ及びドナノービスパーチェム」と呼ばなければならないんだゾ、という偉い

先生もいらっしゃる。それで、「ミサの形をしている」と表現したわけだが、実にこの曲は出来た順番もデタラメなら楽譜もバラバラ、しかもあちこちに「原曲」のカンタータがごろごろしているという厄介さなのである。

その厄介さを少しでも緩和し気持ちを落ち着けるために、理解の手立てを考えてみる。1つは美学的次元で作品を分析すること、2つめは神学的次元で解釈を試みること。3つめは音楽史的に作品成立の過程を解き明かすこと。

成程、そういうアプローチがあるのかと気付いても、1つ1つの方法を実践することの大変さはやはり同じだし、苦労して成し遂げたとしても、それは作品の一面を見るにすぎない。と書けば書くほど、どうしようもない。

しかし、今までのややこしさは、全てバッハの側から「口短調」の存在理由を問い正そうとする姿勢から生じているものだ。

開き直って、音楽そのものを丸かじりしてみると事情は鮮かに一変するではないか! 寄せ集めの継ぎ目は消え、原曲のカンタータは完璧にパロディ化され、ある時は滔々と、ある時は悠々と見事に流れている。巨大な流れの中に散りばめられた多彩な要素はどれもこれは正真正銘のバッハであり、嬉しくなったり悲しくなったり、真剣になったりする。しかもバッハ特有の客観性、共同性にしっかりと根差しているので共鳴や感動の質が果てしなく拡がっていくようだ。

「ミサ曲口短調」はバッハの偉大なプレゼントだ。これが「私」にとってのこの曲の存在理由である。しかも多くの人々とこの遺産を共有するとき、その喜びは確実に成長する。

先日、センセーショナルな「メサイア」を引っさげて日本中の音楽ファンをアツと言わせたT・コーブマン先生は某雑誌で、ヘンデルに「ナカナカイイジャナイ」と自分の肩をポンと1つ叩かれるような演奏をしたいと語っておられたが、バッハもいつも「チャントウタツテクレヨ」と励ましてくれているような気がしてならない。バッハの音楽のそういうところが、たまらなく有難い。

ということで、これを書くのを止め、すぐ練習に行かなくては! 既に遅刻は免れない!!

(解説: 小原一穂)

MISSA

ミサ

Kyrie

1. Kyrie eleison (合唱)

Kyrie eleison

2. Christe eleison (二重唱: ソプラノ I、II)

Christe eleison.

3. Kyrie eleison (合唱)

Kyrie eleison.

Gloria

4. Gloria in excelsis (合唱)

Gloria in excelsis Deo.

5. Et in terra pax (合唱)

Et in terra pax

hominibus bonae voluntatis.

6. Laudamus te (独唱: ソプラノ II)

Laudamus te,

benedicimus te,

adoramus te,

glorificamus te.

7. Gratias agimus tibi (合唱)

Gratias agimus tibi

propter magnam gloriam tuam.

8. Domine Deus (二重唱: ソプラノ I、テノール)

Domine Deus, Rex coelestis,

Deus Pater omnipotens.

Domine Fili unigenite

Jesu Christe altissime.

Domine Deus, Agnus Dei,

Filius Patris.

9. Qui tollis (合唱)

Qui tollis peccata mundi,

miserere nobis.

Qui tollis peccata mundi,

suscipe deprecationem nostram.

10. Qui sedes (独唱: アルト)

Qui sedes ad dextram Patris,

miserere nobis.

キリエ (あわれみの讃歌)

1. 主よ、あわれんでください。

2. キリストよ、あわれんでください。

3. 主よ、あわれんでください。

グローリア (栄光の讃歌)

4. 最も高いところには、栄光が神にありますように。

5. 地上には平和が
善意のひとにありますが。

6. 私たちは主をほめ、
主をたたえ、
主を拝み、
主をあがめます。

7. 主の大いなる栄光のゆえに、
感謝をささげます。

8. 神であられる主、天の王、
全能の父なる神よ。
神がお生みになられたひとり子、
主イエス・キリストよ。
神であられる主、神の小羊、
父の御子よ。

9. この世の罪を取り除いてくださる主よ、
私たちをあわれんでください。
この世の罪を取り除いてくださる主よ、
私たちの願いを聞きいれてください。

10. 父の右に座しておられる主よ、
私たちをあわれんでください。

11. Quoniam tu solus sanctus (独唱：バス)

Quoniam tu solus sanctus,
tu solus Dominus,
tu solus altissimus Jesu Christe.

12. Cum Sancto Spiritu (合唱)

Cum Sancto Spiritu
in gloria Dei Patris, amen.

11. 主のみが聖く、
主のみが王であられる
主イエス・キリストよ。

12. 主は聖霊とともに、
父なる神の栄光のうちにおられます。アーメン

Symbolum Nicenum

ニケア信経(信仰宣言)

1. Credo (合唱)

Credo in unum Deum.

2. Patrem omnipotentem (合唱)

Patrem omnipotentem,
factorem coeli et terrae,
visibilium omnium et invisibilium.

3. Et in unum (二重唱：ソプラノ I、アルト)

Et in unum Dominum Jesum Christum,
Filium Dei unigenitum
et ex Patre natum ante omnia secula.
Deum de Deo,
lumen de lumine,
Deum verum de Deo vero,
genitum, non factum
consubstantialem Patri,
per quem omnia facta sunt.
Qui propter nos homines
et propter nostram salutem
descendit de coelis.

4. Et incarnatus est (合唱)

Et incarnatus est de Spiritu sancto ex Maria virgine
et homo factus est.

5. Crucifixus (合唱)

Crucifixus etiam pro nobis
sub Pontio Pilato,
passus et sepultus est.

6. Et resurrexit (合唱)

Et resurrexit tertia die
secundum scripturas ;
et ascendit in coelum,
sedet ad dexteram Dei Patris,

1. 私は唯一の神を信じます。

2. 全能の父、
天と地、
すべての見えるものと見えないものとの造り主を。

3. 私は唯一の主、イエス・キリスト、
神の御ひとり子信じます。
主はすべての世より先に、
父よりお生まれになりました。
神よりの神、
光よりの光
まことの神よりのまことの神、
造られることなく生まれ、
父と一体であり、
すべては主によって造られました。

主は私たち人類のため、
また、私たちを救うために、
天よりくだられ、

4. 聖霊によって、
おとめマリアからお生まれになり、
人となられました。

5. 私たちのために、
ポンシオ・ピラトの時代に、十字架につけられ、
苦しみを受け、葬られました。

6. 聖書に書かれてあるとおり
三日目によみがえり、
天に昇り、
父の右の座に着かれ、

et iterum venturus est cum gloria judicare vivos et
mortuos,
cujus regni non erit finis.

7. Et in Spiritum (独唱:バス)

Et in Spiritum sanctum Dominum et vivificantem,
qui ex Patre Filioque procedit;
qui cum Patre et Filio
simul adoratur et conglorificatur;
qui locutus est per Prophetas.
Et unam sanctam catholicam
et apostolicam ecclesiam.

8. Confiteor (合唱)

Confiteor unum baptisma
in remissionem peccatorum,

9. Et expecto (合唱)

et expecto resurrectionem mortuorum,
et vitam venturi seculi, amen.

また栄光と共に再びおいでになり、
生きている人と死んだ人とをお裁きになり、主の国は
終わることがありません。

7. 私は命を与える主、聖霊を
信じます。

聖霊は父と子よりいで、
父と子とともに
拝みあがめられ、

予言者によってお語りになります。

私は使徒たちから受け継がれた、唯一の聖なる教会を
信じます。

8. 罪のゆるしのための
唯一の洗礼を認め、

9. 死者のよみがえりと、
のちの世の命を待ち望みます。アーメン

Sanctus ザンクトゥス(感謝の讃歌)

Sanctus (合唱)

Sanctus, sanctus,
sanctus Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt coeli et terra gloria ejus.

聖なるかな、聖なるかな、
聖なるかな、万軍の神なる主。
主の栄光は天地に満ちています。

Osanna, Benedictus, Agnus Dei, Dona Nobis Pacem オザソナ、ベネディクトゥス、アグヌス・デイ、ドーナ・ノービス・パツェム

1. Osanna in excelsis (合唱)

Osanna in excelsis.

2. Benedictus (独唱:テノール)

Benedictus qui venit in nomine Domini.

3. Osanna in excelsis (合唱)

Osanna in excelsis.

4. Agnus Dei (独唱:アルト)

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,

5. Dona nobis pacem (合唱)

Dona nobis pacem.

1. もつとも高いところにオサンナ。

2. ほめたたえましょう、主の御名によっておいでになる
方を。

3. もつとも高いところにオサンナ。

4. この世の罪を取り除いてくださる神の小羊よ、
私たちをあわれんでください。
この世の罪を取り除いてくださる神の小羊よ、
私たちをあわれんでください。
この世の罪を取り除いてくださる神の小羊よ、

5. 私たちに平和をお与えください。

(訳 斎藤純子)

会員募集のお知らせ

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは、主としてバッハの教会カンタータを演奏する事を目的として結成され、今年で11年目を迎えます。これまで、バッハの教会カンタータを中心とした演奏会を多数開催、一昨年には初の海外演奏旅行を行いました。

只今、会員を募集しております。合唱経験の有無、個々のレベルは問いません。合唱が好き、音楽が好き、という方、大歓迎！ 私達と一緒に歌いましょう。バッハの音楽は決してかた苦しいものではなく、人間味にあふれ、時を越えて私達の心に語りかけてきます。

どうぞお気軽に練習会場においで下さい。

●練習日 毎週火曜日PM 6：30～9：00

●会場 カトリック志家教会礼拝堂

●練習曲目 J．S．バッハ モテット2番、5番

H．シュッツ 十字架上の七つの言葉（予定）

●連絡先 木村吉彦 41-1507

菊池節子 46-5269

主催／盛岡パッパ・カンタータ・フェライン
後援／岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・岩手日報社・
岩手放送・テレビ岩手・NHK盛岡放送局・エフエム岩手